

# くにたち しらべ



NO. 13

発行日 2012 年 7 月 24 日  
編集＝くにたち図書館地域資料ボランティア  
発行＝くにたち中央図書館

テーマ

## 『くにたちの地名』シリーズ3 上谷保・下谷保のむら

### 1 国立のむら

国立市域には江戸時代、行政村落として上谷保・下谷保・青柳・石田の4カ村があり明治22(1889)年の町村制<sup>#1</sup>施行に際し、合併して谷保村となり、現在の国立市としてひきつがれてきました。こうした行政村落とは別に、谷保地区



図 1-1 むらの概念図(\*20-3)

(上谷保・下谷保)には近世以来八つの村組織がありました。甲州街道に沿って西から東にむかって並ぶ矢川をはさんだ<sup>しけんざいけ</sup>四軒在家・南養寺がある久保、<sup>じょうやま</sup>城山がある<sup>なかだいら</sup>中平、<sup>しやくじ</sup>西野稲荷がある<sup>えんじょういん</sup>石神、<sup>ちうし</sup>古社八幡宮・円成院跡のある<sup>さかした</sup>千丑、<sup>しもやぼ</sup>谷保天神のある<sup>しもぐみ</sup>坂下、<sup>しもやぼ</sup>本田家がある<sup>しもぐみ</sup>下谷保、<sup>しもぐみ</sup>白山神社のある<sup>しもぐみ</sup>下組の八つです。

これらのむらは、甲州街道を中心にして、立川崖線と青柳崖線に囲まれた青柳段丘上に広がった村落といえます。

村組織は、家を単位とした共同体を、構成しています。従ってその境は、家作や屋敷内、講などのため複雑に入り組んでいました。地番<sup>#2</sup>としては、いずれも大字<sup>#3</sup>は谷保でした。小字は、甲州街道の南側は栗原が下谷保・下組以外共通に含まれており栗原が谷保村の中心だったと考えられます。甲州街道北側は、<sup>うえみねした</sup>四軒在家は上峰下、<sup>うえみねした</sup>久保は上峰下、<sup>うえみねした</sup>中峰下、<sup>うえみねした</sup>中平は中峰下、<sup>うえみねした</sup>石神・千丑は、<sup>うえみねした</sup>下峰下、<sup>うえみねした</sup>峰上と構成されています。坂下については、<sup>かりやうえ</sup>仮屋上、<sup>かりやうえ</sup>滝乃院、<sup>うめばやし</sup>梅林、<sup>うめばやし</sup>天神下からなり、<sup>おきょうづか</sup>下谷保は、<sup>おきょうづか</sup>御経塚、<sup>ひがしのはら</sup>東之原、<sup>ひがしのはら</sup>梅林、<sup>ひがしのはら</sup>一本松、<sup>ひがしのはら</sup>下組は一

本松の<sup>こあざ</sup>小字地区で構成されています。

## 2. <sup>かみやぼ</sup>上谷保村

### 1) 四軒在家（しけんざいけ、しけんざけ）

上谷保の最西端にあり、青柳と接しています。

ママ下湧水傍の説明書板には、上（カミ）の四軒在家（シケンザイケ）土地  
区画整理組合とルビがふってありますが、区画整理によりハケ上につくられた  
公園には「シケンザケ」と書いてあります。現在は「しけんざけ」とも呼んで  
いるようです。

北条氏が、小田原合戦で豊臣秀吉と戦った<sup>てんしょう</sup>天正8（1590）年、上杉景勝<sup>かげかつ</sup>  
、前田利家の連合軍の猛攻を受けて八王子城が落城したとき、城主北条氏照<sup>うじてる</sup>  
の臣4人がこの地に逃げて百姓を始めました。この時の4人の姓は、佐藤、佐  
伯、堀江、原田といわれています。現在残っているのは、佐伯、原田だけです。  
むらの北部を矢川が流れ、そのほとりにある五智如来は、この落人たちが建立  
したと伝えられています。（\*2 市史中巻P163,P664,\*3）

なおこの四家について、『くにたちの自然と文化を守る会会報第5号』（平  
成4(1992)年、において、『新編武蔵風土記稿』上谷保の項に「村内に遠藤・  
堀江・三田・佐伯を氏とせる民あり、土地開けしよりの四家なりと云うされ  
ど旧記も所持せざれば、古を知ることあたわず云々」と、かかれていること  
と、第二次世界大戦前に、四軒在家に佐藤・堀江の家が存在しなかったこと  
から、この四軒は謎と記しています。（\*71）

### 2) 久保（くぼ）

古文書では「窪」と書かれていますが、これは低地でしかもデルタ地帯とい  
うことを意味しています。矢川の流域に属し、古多摩川の分流の名残ともいわ  
れます。（\*40-5）

本町内（谷保村中心部）では最も低地となるため、夕立などがあると甲州街  
道は河川のように水が溢れることがありました。ただ矢川通りを境にして、東  
部は台地となっていることから、東部を俗に「<sup>うてな</sup>台」と呼び、西部の低い地域  
は「窪」と呼んでいました。

ここには<sup>なんようじ</sup>南養寺、<sup>ようふくじ</sup>永福寺と二つの古刹<sup>こさつ</sup>（\*古く由緒ある寺）があります。

### 3) 中平（なかだいら）

旧谷保村の中央部に位置し、村の真ん中の平地で最も起伏のないむらです。  
そのため久保と千丑の低地帯に対して、中平の名称が発生したと思われま  
す。（\*40-5）

まちの学校の草分けとなった現在の国立第一小学校（潤沢学舎→公立小学  
谷保学校→谷保尋常小学校→国立第一小学校）の所在地です。南部には三田

領主の居城蹟と伝えられる「城山」があり、菅公所縁の地でもあります。三田領主と関連し、現在も三田の姓が多い地域ですが、西多摩の三田村（現青梅市）とも深い関係があるという話で、青柳の由来ともつながりがあるといわれます。（\*40-5）

ハケ地帯には農家が連なり、むらの南方で多摩川河川敷近くの谷保田圃に降りると、「荒田のたまり（津戸ヶ淵との言い伝えもある）」という沼がありました。（\*3P・79）

#### 4) 石神（しゃくじ）

「社宮司」の転訛<sup>てんか</sup>（本来の音がなまって変わった）したものといわれ、ちょうど谷保村の真ん中あたりに位置しています。市役所から国立三中へ行く道の両側と、国立一小北側の甲州街道橋より東側をかこんだ地域です。（\*20-1）

西隣が中平、東隣は千丑に接していて、現在の富士見台第三団地南側の南武線南側に沿った地域です。「オトウカモリ」とも「おたか森（御鷹森）」とも呼ばれる小高い林を少し下がったところに、現在も西野家が<sup>まつ</sup>祀る稲荷（西野稲荷）があります。このむらには谷保天満宮の別当寺安楽寺六坊のうち「邑盛坊」（ゆうせいぼう）の庵寺があり、その守護神として石凝壳命<sup>いしごり</sup>が祀られていました。石神という地名の由来（\*『安楽寺記』に明記）となつたご神体の石棒は、現在谷保天満宮宝物殿に保管されています。（\*3・P79）

むらの南部には石神道あるいは通称「栗原道」と呼ばれる、小道が通っており、栗原横町という集落路がありました。このあたりが、もと谷保村の中心地だったようです。

（\*3P・79）

かつては、道祖神（庚申塚）が国立町役場の入口にありました。（\*40-5）



図 2-1 谷保村役場位置

#### 5) 千丑（ちうし、ちゅうし）

千丑は、現在の市役所のちょうど南側に位置し甲州街道をはさんだ地域で、地形的には青柳段丘面から下の湧水にかけてのむらです。谷保天満宮のお膝許であるため「千丑中司」と言いました。千疋の牛という意味で、この地が牛の牧場であったという説と関係していると考えられます。（\*3,\*5・P180）現在は千丑という字を用いていますが、江戸時代の記録などには、「血丑」、「千牛」ともかかれています。（\*3・P79）

旧上谷保村の東端のむらで、西隣の石神とは屋敷境で分かれ、東隣の旧下谷保村の坂下とは仮屋坂と呼ばれる小道と湧水の流れて隔てられています。石神との西南の境には、黄檗宗の藤井山円成院跡が、坂下との東北の境には、谷保天満宮別当寺梅香山松寿院安楽寺と号した天台宗の寺があったと古記録にあります。円成院跡とされる地の北側ハケの斜面に通称、矢沢稲荷があります。(\*20-3)

江戸時代に『谷保案内』を書いた遠藤由晴の出生地で、清水の立場（茶屋）もありました。

### 3. 下谷保村

#### 1) 坂下（さかした）

かつての下谷保村の西端に位置し、天満宮表参道前的大通りから、南へ坂下橋（编者注：天神橋のことか）までの300メートル弱の甲州街道を中心に、南北に広がったむらです。(\*20-3)

「坂上」「坂下」「河原がた」と三つの呼び方をする地区があります。小字は、仮屋上と梅林から構成され、栗原、天神下、一本松も一部含まれていません

地形的には、青柳段丘と立川段丘が合流したところで、天満宮裏参道あたりは、急坂となっています。坂下は千丑の東隣で、谷保天満宮境内も含まれます。千丑と坂下は、前述千丑に記述したように仮屋坂と湧き水で隔てられています。その坂の上は仮屋上となります。

下谷保を西に下ると、谷保天満宮に沿って天神坂があります。坂下の名前の由来は、谷保天満宮に沿う東から西への下り坂の南側も低地になっているところからついたようです。天満宮表大門あたりが坂の一番高い所で、東から三軒は、かつて道路が切り崩されたため。

1m以上屋敷が高くなっており、ここだけ「坂上」と呼んでいます。屋号ともいえます。天満宮のある南方、旧甲州街道の南側一帯は「河原がた」と呼ばれていました。永享四（1432）年（足利時代）五月、北部村山辺より野水の流出と、文政年間（1818～1820年）の三年越の大雨で多摩川が氾濫し一面泥海と化し、水の引いた後の石河原が「川原がた」であるといわれています。(\*3・P73,\*20-3)

谷保の子守歌でも「かわらがた」がうたわれています。(\*23・P55)



図 2-2 坂上

#### 2) 下谷保

現在の国立市谷保・富士見台1～2丁目、府中市西府町1～5丁目、西原町1～4丁目の一部にあたる地域です。字として梅林、御経塚、東之原があ

ります。

江戸時代から歴代名主をつとめた本田家があります。また谷保天満宮獅子舞の練習をした獅子宿がありました。

下谷保の下（シモ）は、江戸から見て京都を上とする上谷保の上（カミ）に対する意です。天保3（1683）年、谷保村は天神坂を境にして東側を下谷保、西側を上谷保の二村に分かれました。下谷保には、上谷保村と下谷保村の入会や家作があり上谷保との境界について『新編武蔵風土記稿』には入り組んでいてはつきりしないと次のようにかかれています。「大抵西ヲ上トシ東を下トイエトモ地理犬牙ニシテ細カニ区別スヘカラス」新田も開かれ、『新編武蔵風土記稿』に武蔵野新田の一つとして記載される上谷保新田は下谷保新田をさしており、戸倉新田（現国分寺市）と地続きであることから文化・文政（1804～1831年）以前に同新田の持添<sup>もちぞえ</sup>#24 となりました。（\*22・P1056）

（#24 もちぞえ、江戸時代、村を二領に分割した場合、一方に属する百姓が、他領にその一部分の高を有すること。または出作百姓の土地をいう\*13）

下谷保は谷保天満宮より東へ甲州街道をはさみ、隣町の府中四ツ谷境までです。南東部は下組と接します。

明治8（1874）年に上谷保村と合併し、谷保村となりましたが、さらに明治21（1887）年の市町村制の公布により、石田村飛地、青柳村が加わり、新しい谷保村が成立しました。

### 3) 下組（しもぐみ）

旧谷保村の最東端に位置し、現在は住宅地となっています。東を下（シモ）と称することから、下組としたようです。東隣は府中市（元西府村）です。（\*3）。字として一本松の地域に相当します。古くは、有名な谷保茄子が主として生産され、近在は勿論遠くは川越、八王子、目黒方面で売りさばかれ、おいに賞味されたと伝えられています。（\*40-5）

白山神社があります。

## 4 語句の説明

### #1 町村制【ちょうそんせい】

町や村の組織運営に関する地方制度。江戸時代に生活共同体として制度化されていた町や、村を、明治11(1978)年の郡区町村編制法により行政単位に位置づけ、同21年の町村制により整備した。町村を整理・統合し、町村会は府県・郡の強力な監督下に置かれた。（\*12）

### #2 地番（ちばん）

土地登記簿に登録するために土地の一筆ごとにつけた番号。（\*11）、明治時代の地租改正令において、実施されたが、検地帳に記載され名称を用いたのが多い。

### #3 大字（おおあざ）

市町村区域内の1区画を示す。いくつかの小字を含み、近世の村に相当する場合が多い。（\*13）

### #4 小字（こあざ）

大字を構成する区画。単に字という場合は小字をさす。

## #5 字 (あざ)

土地の小名の名称。田畑・山林・野地などにつけられた。口頭では名所・小名・下げ名ともいわれたが、帳面・証文には字だけが使用された。(\*13)

## #6 地租改正【ちそかいせい】

明治政府によって1873年の地租改正条例で全国的に実施された土地改革。江戸時代の農民の土地保有に対し、土地所有区画の決定と地価算定を行い地券を発行してその私的所有権を認定した。

## 5 出典・参考資料 ([ ]内の図書記号は 国立市中央図書館、( )は中央公民館)

- 1) くにたちの歴史 編纂 国立市 平成7(1995)年 [10・B1]
- 2) 国立市史 上中下 編纂 国立市 昭和63(1988)年 [10・B1]
- 3) 国立歳事記 原田重久 昭和44(1969)年 [10・B1]
- 4) 国立風土記 原田重久 迷水亭書屋 昭和42(1967)年 [10・B1]
- 5) わが町国立 原田重久 迷水亭書屋 昭和50(1975)年 (291)
- 6) くにたち歴史探訪ガイドブック 改訂版 平成16(2004)年 [10/C6]
- 7) 江戸名所図会を読む 川田壽 東京堂出版 1990年 [01/C4]
- 8) 国史大辞典13 吉川弘文館 1992年 [R291]
- 9) 日本人物文献目録 法政大学文学部史学研究室 1974年 [R281]
- 10) 日本人名大事典 平凡社 1938年 [R281]
- 11) 広辞苑第5版 三省堂 1998年 [R813]
- 12) 岩波日本史辞典 岩波書店 1999年 [R210]
- 13) 日本史用語大辞典、日本史用語辞典 柏書房 1979年 [R210]
- 20-1) 国立の生活誌 一古老の語る谷保の暮らし(一) 1982年 第14集
- 20-3) 国立の生活誌Ⅲ谷保の講中倉と講  
昭和60年くにたちの暮らしを記録する会国立市教育委員会 [10/D1]
- 23) 我がふるさと国立 郷土史考随想 沢井義男 けやき出版 平成3(1991)年 [Y 3]
- 40-5) 郷土史研究資料 第1集 地名等による郷土の史的考証 沢井義雄  
北多摩郡国立町教育委員会 (郷土文化館)
- 71) あおぞら 一国立の自然と文化一 国立の自然と文化を守る会 2002年